

出島竹齋の和歌について

—『沖の千重波』—

高木桂蔵

秋

立秋

手ならししねやの扇も今朝ははや浅芽かつゆとおきてけるかな
あきも今朝入江のあしにおと立てあまの小舟やおとろかるらむ
いろならはなにかいはむこの朝け身にしみわたる秋のはつ風
ふきかはるかせに月日を算ふれはとしもなかはを今日は過けり

浦立秋

沖方にはつあきかせや立ぬらむ須磨の浦わになみさわくなり

庭立秋

あき來ぬと庭の浅芽におきそむる露をあはれのはしめなりける

秋の歌の中に

一本の尾はなかもとを生いてて千々にしけるおもひくさかな

初秋

ひるまこそあつさはのこれ朝ゆふは扇おくへくはやなりにけり
秋くれは桐のひと葉もこころありて月みむためと落そめぬらむ

初秋月

萩の葉におくしらつゆにほのめきて光さやけしみか月のかけ
なにことをかたりも出ぬわかそてをむかしのあきの月もとひ來て

初秋露

今朝ははや庭の浅芽にしらつゆの秋のあはれをむすひそめけり
もの思ける時残暑を

老松のこすえになつはのこりけむおとする風のすずしからぬは

露

秋くれはかしこき名をも負ひにけるつゆの玉しく浅芽おのこは

秋露

秋ふかくなるさへみえてあさあさな浅芽における露のしらたま

出島竹斎の和歌について

萩露

はきの上の花にたまなすつゆ見れば春のやなきの色はものは
 風わたる萩の葉すえはつゆのみかやとりし月のかけもくたけて
 宮城野のはきの上吹あさかせにつゆもいろいろあるものところみれ

野萩

ももくさや千くさのなかなになくさと生ひ初や野邊のあきはき

女郎花

待人のさためなればをみなへしゆふへの露にまつなひくらむ
 ふきかはるころそらなる秋風になとをみなへしなひき初けむ

原薄

ちちふねの秋のゆふかせふき落て尾花なみよるむさしののほら

藤袴

ぬきかけし人はしらねとふちはかま匂ふあはれの深き野邊かな
 むらさきのいろ香もふかき藤袴おもひをかけしささかにのいと
 うと山にのほりて蘭の花の咲たるをみて

ふちはかま裾回にほふうと山をうとしと誰か名をはつけけむ

朝顔露

はかなさに又はかなさをおきそふる庭のまかきのあさかほの露

虫

さきにはふ千種の花のいろはててた虫の音と野はなりにけり
 駒なめてききにや行む秋の野はくつわてふ名のむしもなくなり

ねさめに虫の聲をききて

千五百秋の長きにむしはかはらぬを我よのみかく更にけるかな

きくのはなみる人ごとに長月のまかきにむすへつゆのたまの緒

鈴虫を家の軒に籠に入れて釣てければ夜中曉となくあはれ
 なる聲にて鳴ければ

妻琴のねにそきこゆるひとり寐のまくらにちかき鈴むしのこえ

秋風

はきの上尾花はすえのしらつゆのたまふきみたす秋のゆふかせ

暮秋風

秋くるるあらしのおとはいく年も馴てきくたにさひしかりけり

鹿

はるかなる鹿のなくねをしるへにて外山の秋のあはれをそしる

小鹿の里にて秋のころ

有渡やまと人はいへともうとからぬあきのあはれそ小鹿なく里

月前鹿

さを鹿のつまとふこえにゆめさめておき出てみれば月の入かた
 さひしさのかきりはいとしられけり月いるかたの鹿の遠こえ

月

秋のよの中月のさやけさにほしのはやしは見えずなりけり
 かつははれかつはくまなす雲出てつきも浮世もひとしかりけり
 清見かたその玉藻のむらくもはさはらてすめる月のかけかな
 賤の雄を月もたすけてよもすから山田のいほりもりあかすかな
 なにことをかたりも出ぬわか袖をいかなれはとて月のとふらむ
 おほきみの露のめくみはほとほと錦も麻もあまるそてかな

江月

さくやこのあきのはなとそかけにほふ難波堀江にすめる月かけ

野月

むさし野や尾花かすえになみ立て月のひかりもさわく夜半かな

風前月

春秋はこすえにこころとむれとも月あかき夜はそらにこそなれ

袖月

あはれしるわがたもとにもあらなくに尋來てすむあきの月かな

深夜月

あきの夜のふけゆくままに清見かた沖より寄るつきのやへなみ

濁月

清見かた月にくまなきあきの夜はむかしもかくや三保のまつ原

河月

たま河やはきのにしきのしからみはくまとはならし秋の夜の月

禁庭月

くまとなるひと葉はちりて桐壺にいよいよきよく月はすむらむ

雨後月

むら雨はふもとをすきてみそらなすふしの高嶺に月はすみけり

庭前月

庭もせにかけなす松もあきのよの月まつよひはつれなかりけり

九月十三夜

長月のこよひのかけのかたむくは過にしもちの月よりもうし

衆人賞月

このころのさやけき月をよの中になかめぬ人はあらしとそ思ふ

深夜田家月

月かけはいなはおもけに露おきてふけ行ほどそあはれなりける

ある人に誘れて浦の月をみに行けるに。

ふりはへてこよひみむとはおもひきや袖師かうらの秋のよの月

夫にわかれてひとりして月を詠むる人によりて遣はす

鹿兒自ものひとりおきゐて月をみはかつらの露や袖ぬらすらむ

雁

とこ世へはかすみていにし雁かねの月をたつきに今や來ぬらむ

月前雁

むらくもはくまなくはれてすみのほる月にそかかる雁のひとつら

雁渡來

しらくもの越のたかねの立舞にあきしりそめてかりは來ぬらむ

雨中雁

月照らはかすもよむへきかりかねを聲にのみしる雨のゆふくれ

山里擣衣

山さとのきぬたの聲をききしらは都に秋はなしとこそおもへ

田家擣衣

穗浪たつかと田をわたるゆふかせにあしのまろやに衣うつなり

菊

百くさの花よりのちにさき出てなほゆくすえはしらすくのはな

かさしても老はかくさてきくの花なほしら雪のふりまさるなり

出島竹斎の和歌について

月前菊

さくの上におくしらつゆをやとりにて月さへ花の香に匂ふなり

武家の菊

たた人のかけておよはぬ物部の手うえのさくのはなの雄々しき

長月のつこもりかた菊の花盛りなりと聞て

人のもとにつかはす

くきてゆく秋は日かすものこらねとなほもさかりときくの花その

松間紅葉

暮いそく松のはやしの下かけに入る日をのこすつたのもみちば

もみち葉の色にならひて常盤なる松もあきしるこちこそすれ

紅葉みにまかりて

葉かへせぬ松に雪ふるあした迄もみちのにしき散すもあらなむ

船山紅葉

いとまあらは行てはやみむふな山の千入のもみち風ふかぬまに

久能山の小井戸の谷のもみちを麓よりみ上て

久能山の峯にいる日のかけきえて谷のもみちにのこるいろかな

九月霜

ふけ行かは霜とこそみめ秋くるるくさのすえはにむすふゆふつゆ

秋田

穂なみたつころにしなれは神等のめくみのつゆのふるの千町田

秋雨

何となく世のうきふしそしのばるる雨の降日のあきのゆふくれ

秋夜

月ゆえにいをねぬよひを始にてねさめ勝にそ夜はなりにける

秋山

あきのいろに月をもそめてありあけの空あはれなるさかの山哉

秋野

秋の野の千くさに交るひとくさの風をうらみのくすもありけり

題しらす

秋の夜の寐さめにむしのこえきけは片敷そてにつゆそこほるる

秋のうたとて

あつさをはなほなつとこそおもひしかさすかみにしむ萩のゆふ風

秋の歌の中に

さもあらはあれとはたれかおもふへき出来る月にかかる浮くも

一本の尾はなかもとを生いてて千々にしけれのおもひくさかな

冬

初冬

夜のほとに都もあきはつきぬとて今朝はしくれのふりて來にけり

山々をめくるしくれの雲間よりあきのかたみのみねのもみち葉

初冬曉

秋冬の行來のをかのあさちふにしもおきそむるあかつきのそら

をしみてし秋のかたみかほのほのとねさめのまとにのこる燈火

初冬紅葉

入日さすかけかとみればさはあらてしくれにきほふ紅葉也けり

峯紅葉

くれなるの雲かとはかり夕日かけ入にしのもみねのもみち葉

時雨

音きけは秋より松にこもり居しかせのさそひしくれなるらむ
よへ置しつゆもまたひぬ浅芽生にけさはしくれの雨そふりける

初時雨

染かぬる松のこすえはふりすてて紅葉にうつるむらしくれかな

連夜時雨

よなよなのしくれは杉のむら立に降かとすれはまたはれにけり

嶺時雨

山々は時雨にくるる雲の上にいり日のかけののこるふしかね

落葉

ふきおろすみねのあらしに埋れて落葉にまよふたにのほそみち
みるかうちにしくれははれて梢よりおろすあらしにちる紅葉哉
もみちちる立田の山はくれなるの空にしられぬしくれふるなり

落葉浮川

吹おろすみねのあらしに秋のいろの今朝こそまされたに川の水

河落葉

大井川峯のもみち葉ちりそめてけふよりみつのあきをしるかな

市落葉

しつはたのもみちをさそふ山かせは安倍の市路に秋のいろしる

風前落葉

みな人のをしむころの千入ともしらてやさそふ風のもみち

落葉深

かれわたる浅芽も今朝はみえぬまで庭は落葉にうつもれにけり

霜

いろいろの草のさか野も枯はててひとつにはほふ霜のはなかな

初霜

秋の野のいろをはしらぬくさの葉も今朝こそ霜の花さきにけれ

竹間霜

なよ竹のさ枝もたはに霜降りてねくらあらそふむらすすめかな

さえ安きものにしあれはいろかへぬ竹をたのみて霜はおくらむ

十月はかりかかしの破笠着てたてるをみて

しくれにも菅のを笠をかたむけて山田のひつし守るそほとや

木枯風

誘へともさそふ甲斐なき松か枝としりてややとるこからの風
都人にしきをきよときのふけふもみちをはこぶさかのやまかせ

寒松

野も山もくもこの葉もふきはらふあらしにのこる松のむら立
草は枯この葉はちりてこからしにひとりあらそふみねの松かえ

田残雁

つくはねのしくれの空をよこきりて裾回の田井に落るかりかね

冬夜長

冬の夜は八こえの鳥をききてのちなをなくのみ待あかしつつ

出島竹齋の和歌について

さめはててつくつく聞はあかつきのかねの音さへ霜にきえゆく

雪のあした野邊をみやりて

いつかたとわけてしのはむかたもなし雪のあしたの四方の詠は

名所鷹狩

大君のみにへのためにかりくらす淺野のみゆきいたくなふりそ

日暮鷹狩

かたそてに雪をしのきてゆふまくれ鷹手にすえてかへる宮ひと

冬の歌とてよみける中に

あはれなり秋のあはれをうつみたるこの葉をなかつ谷川のおと

江寒草

入江ゆく棚なしをふねさすさをもみゆるはかりに声はかれけり

冬月

かれのこる小笹にむすふゆふ霜のさむさをうふる冬の夜のつき

しばの戸の落葉か上を問ふものはこすえくまなく照らす月かけ

河冬月

舟路さへたえてこほれる最上川よこきりわたるふゆのよのつき

寒月呀

ささの葉におくゆふ霜の小夜更てこほるまにまにさゆる月かけ

さえわたる月のひかりをととめむと川の淵瀬はこほりとつらむ

雪中月

ま白にもみえもするかな小野山のゆきにみがかれいつる月かけ

遠千鳥

志賀の浦こほりこほりて千鳥さへ沖をなきさと今朝はなくなり

水鳥

大井川もみちなかれしのちもまたなみをいろとるをしのむら鳥

水鳥多

月夜よしむれるるをしの劍羽になみをよこきるかけそ見えける

篠上霰

霰ふる小ささの原を見わたせはぬきとめられぬたまそしきける

雪

春みしはさかぬこすえもありつるをなへてにほへる雪の夕くれ

松杉もみながらゆきにうつもれてなにをしるしにみわの山もと

初雪

ふりそめてつもるこすえを花とみむ雪にもつらき今朝の山かせ

まつすきも雪のはつ花にほふなりころしてふけ野邊の朝かせ

あさかせよころしてふけ木も竹もみなみな愛る雪のはつはな

夜雪積

ふけゆけは軒庭のたけの折るるおとに大雪ふるを老もしるかな

松雪

たえすふく松のあらしの音さへもふるしらゆきに埋みこめつつ

閨夜雪

たまたまにむすひしゆめをおとるかすのきばの竹の雪折のおと

遠望雪

むさし野や今朝うちみれは雪ふりてま近くなりぬをつくはの山

遠山雪

遙なるこしのしらねはしらねともそれかとそおもふ雪の遠やま

雪似雲

ゆきふれはきのふもけふもやまやまに立舞もせて掛るしらくも

雪逐日深

白妙にふりつむゆきの日かすへて軒よりたかくなりけるかな

浦雪

ふきはらふ風もなきさの松かえにふかくつもりの浦のしらゆき

雪の降積りしあした

草も木もみな白妙にゆきふりて身につむうさもわすられにけり

夜神樂

には火たくくもるのよそにすみわたりあかほしうたふ宮人の聲

歳暮

おもふことなくてくれ行年なれはなほしもことをしまるるかな

なす業もよみ出る歌もくれ竹のふしなくてのみくるる年かな

をしまるる年のゆくえやつもるらぬ信濃の山のみねのしらゆき

かく斗りくれ行あはれなかりせはあすくる年もうれしからまし

老人の歳暮

よの人にかく惜まれて行くことくわか身のはてもならはましかは

老後年暮

おろかなる身をももらさてくれてゆく年浪はかり寄てけるかな

冬山風

くさも木も人目も枯るるしはの戸にたえまなくとふふゆの山風

冬松

花やきしもみちの色はあともなしみとりかはらぬみねの松かえ

冬田

賤の男か蒨田のあとのひつち穂をおくれてあさるかりの一むら

戀

戀

吾こころわかこころにもまかせぬは忘れむと思ふ人のおもかけ

契夢中戀

逢ふとみる夢ははかなく覺はてて後のこころはいかにかもせむ

隔戀

呉竹のひとよのほともつらきかなれにし人を隔つとおもへは

秋戀

なひくかたあるともしらてをみなへし咲野をしたふさを鹿のこえ

寄山戀

あまさかる遠つあふみのとほくともあははの山の逢てあるへき

きのうみの名高のうらのなみ高みよれとよられぬ海士小船かな

寄露戀

わかみかくもゆるおもひもなかるへし君かなさけの露しかからは

寄夢戀

夢の世の夢にみえたる面かけのうつつにいかてわすれさるらむ

待暮戀

おのか身はいかたしなれや朝々なくれまたぬ日の絶てなきかな

出島竹斎の和歌について

雑

神祇

あさひらきこき出るふねにあらねとも世に住吉の神をたのみまむ

浦

浦といへは何處はあれと神代よりかきりなきよをすみよしのうら

山

みちみちにおもひ入さの山高みふもとをたにもみぬかなしき

濱

かきりある人のいのちも長濱のまさこのかすとたのみこそすれ

橋

おのか身の世わたるはしをかけむには先歛鎌をはしらにはせよ

太刀

くさなきのつるきの靈ひろこりて太刀のみいつそ世に類ひなき

關

こころをはうらのきよ見にととめおかむあけ行關を身は越ぬとも

杉

ゆきにうもれかすみにきえて柄のみねにしけれるすきのむら立

大政大臣

こころ知る人こそなけれときとして積るも消もせきのしらゆき

百姓

物みなはよそひはなやくいまの世もみの着て作る田人いそしも

遊女

よひよひにちりはおかねと末終によらむかたなき梶まくらかな

軒庭

八重かすみ朝夕つつむ梅か香をぬすみてはこふのきのまつかせ

物思ふ時に

わかそてに結へるつゆを何ゆえとしらてや月のかけやとすらむ

山家待人

這入にはつゆの玉しきにはの面は君まつかせのおとのみそする

千本松原

いく千本かくさかゆるはむかしたかねの日の松の名残なるらむ

東京をよめる

むかしより尾はなにつつく武藏野も家居ひまなき雲おとなりぬ

ある時よめる

霜おかぬくろかみ山にすむ人もつゆの身などかきえのこるへき

津のくにの長柄のはしも中々に著すは人もしのはさらまし

雙山をよみける

いろいろのくもの褥につつまれていつもおひせぬふた子山かな

ある時よみける歌

はつゆきにしのはるるかなよしの山うき代わすおし花の面かけ

よの中の人を

夏はかけ冬は日のさすかたへのみこころをよする世のなかの人

ある人によみて與ふ

春の日もかきりしあれはさくらはな色香たのむな風ふかすとも

鐵道

むさし野のかすみかせきをあさたちて夕の海照る月をみるかな
比良やまの高嶺の雲とおもふまにそれより上にはれしふしかね

閑居

はなもみち世のいろしらぬ隠所はまつのあらしも耳にさはらす

老人花見

世をいとふくさのいほりの老人もよのすかたなる花をみるかな

よの中の事何くれとおもひつつけるをりに

世をおもふ寐覺のこのむらしくれ月にやと貸す種とこそなれ

茶の盛りに行はれけるをほめて

駿河路やはなたちはなはむかしにて木の芽にほふ山ふきの花

東京の歌とて

うらみても甲斐こそなけれさくらはなちりにしのちの峯の松風

巖上苔

ここにしくところはなしと苔むしろいはほの上に誰かいねけむ

花を瓶にさして

はなかめに千とせの松をさしそへて君か齡ひのかすにさためむ

土の靈

わくみつも生る木くさも稲麥もつちのみたまを得ぬものはなし

水車

谷河のほそきなかれをたのみにてめくるうき世の水くるまかな

竹有佳色

ふる雪にうつもれなからくき竹の千年のいろはかはらざりけり

ある時よめる

位山ふみみて登るみちはあれとつくへきつえのなきそかなしき
病にかかりて癒たりけるをりに

また行ぬ夜見の國部ゆあやくもかへり來にける心地こそすれ

黨派

國々の月かけおほむらくもは風あることをしらてやあるらむ
吹まよふむらくもことに掛れともいつかは月をおほひはつへき

遁者庵

世はうしと遁れなからも庵みれはなほうの花のかきねなりけり

心圓

身をまもる關のとひらのあけたてに違はざりせは易けからまし

ある時よめる

松のはにむすふもつゆははかなきをいかるときはに消のこるへき

老人向鏡

眉のしもむすへるまでのおもかけのうつるつらさのます鏡かな

娼妓に與ふ禁戒の歌

さくら花ふかき色香もこころせよ松もよはひにかきりある世を

題不知

來し方もなほゆくすえもうき世そと思へはおもふこともなき哉

ある時よみける

梶とりたれをたのまむ國のふね四方の海つらなみさわく代に

深山庵

ふきはらふ風たにもなく雲とちて實にかくれ家のまつとした庵

出島竹齋の和歌について

つくつくとよの中の事をおもひて

のとかなるかすみのおくの雨くもりこころにかかる花の夕くれ

明治十五年一月十九日竹齋か大政官より御書給はり

權少教正に昇りたるをほきて

三浦弘夫

色そはるみとりはそらのものとのみあふく千ひろの竹の下かけ

返し

くれ竹のふる葉にまさるみとりをはそら色とのみ人やみるらむ

内務卿松方正義公より七十賀の歌送り給はりければ

雪きえぬ小鹿のはらのおきなくさ君かめくみにはるをしるかな

大久保一翁君より七十賀に硯を給はりければ

たまはりし硯の海をこき出て和歌のうら邊に寄らむとそおもふ

ある時よみける

よのなかにうみたる人は山柿のをちてくだくるほかなかりけり

久能山の寶物卯の花をとしのよろひをみて

うの花のをとしの糸にむすはれてうき世の中もやすくこそなれ

報徳社の集會所によみて送る

生ほこるよもきのたねはぬきすてて麻のみつくる眞こころの友

皇國心

わか國の風ふき立よむかしよりこまもろこしもなひきしものを

七月はかり一橋殿御奥方御隠居

久能山へまうてさせ給ふにいと暑き日なれば

よみて奉り侍りける

堪かたきあつさしぬきて久能山のみねのまつかせあふく君かな

諸官員の人々又學校教員生徒の暑休また十二時ひけ

杯いへるをききて

ひとみなのいとふあつさをなかなかに愛忍つつつくるいねかな

久能山に雨こひすとて参籠してよめる

あめの下水穗の國の名もしるくふらさらめやはけふのあまこひ

紺屋町徳川二位公より歌奉れと仰られけるよしの

傳へをうけ玉はり侍り則よみて奉り侍りける

色やかぬ淡海の浦のいそもみちみるめはなしとおもひこそしれ

あさゆふにむすへるしもの下くさを高嶺の紅葉いかにみるらむ

いせのおほみやの祭主に久邇宮の立せ給ひしをおもひ奉

りわか久能の宮の神官に大神の子孫の花族の中ならせ給

はむ事願ひ宜奉れとはたさされはよみける

あふひくさしけりさかゆくその中にむかしの二葉しる人もかな

郡長近藤弘氏によみておくりし歌

廣き名をおほふめくみの袖笠にしくれをしらぬさとの子等かな

一月はかり歌はいかにといへりけるに答へける

をきなくさかしらの雪にうつもれてことの葉いまた下朧もなし

大久保元老院議官一翁君より消息のおくに書付遣はされ

給へる歌今年七十一にならせらる

花とりをまつたのしさに七十歳を越しことしもかはらざりけり

大川宗炳氏か母の七十賀に寄川祝を

年なみのたちかへりゆくすみた川まつわかみつに君そくむへき

この母とおなしく吾も七十の齡かさねたればかたみの

祝のこころをよみける

すみた川濁らぬ水にけふよりはかたみに千代のかけをうつさむ

逸見伸三郎氏久能山皇典學校を辞して相模國大山町

に帰られる送別會によみて遣しける

別れてのまたくといふ山の名を神にもかけてたのみこそせめ
さらはとも伊邪ともいふないはずとも露けかりける別路のそて

正博君の五位にならせ給ふ時歌奉れと仰られければ

よみて奉りける

梅かえのゆるしのいろに今年より匂ふもうれしあやのころも手

秋の業に學ひの怠りけると

秋田かる業にうもるちりの身はおこたりやすしことの葉の道

誹諧の發句といふものの添削をわれにせよとある人の

せちにいふままに筆加へて返しやるとて

長みしかあやははれと風流たるこれもひとつの言の葉のみち

女のなくなりたるはしめの年の盆にある人の許によみて遣す

しらつゆときえにし玉のかへるとこよひは君か袖ぬらすらむ

春二月八幡山成る宣長故翁の靈祭りに人々寄花祝といふ

事をよみ侍るよしをききて

さきそむる御前の花のゆふ榮は朝日にほふこちこそすれ

おなしをり樂を物せしとききて

からことも神のみまへにしらふれは大和のことと聞そなさるる

三浦弘夫吉岡弘和田歳貢小川宜圓ゐして舊事をよみける

おもふとちこころひかるるふるとは今のうつつの心地こそすれ

おのかこころを人の問ひければ答ふる

すかたこそつつれとみゆれ人しれぬこころは大和にしき也けり

明治十五年一月廿日皇學舎始に生徒へよみて示す

故事のふみのはやしにわけいりて國の道をはさとれとそおもふ
かけ高くさかえこそ行けひめ小松くにのをしへの人にひかれて

おもふ事ありけるをりに

山の井のみつからにごるころともしらてや人の群をなすらむ

山ふきの花のしろきをよのつねのに交へて送られしかば

はしめてしろき山吹を見めつらしく思ひて

白銀のいろをもそへてめづらしく香にこそほへ山ふきはな

人々にさとして

言の葉はよかれあしかれ唐よりも日本にしきをこころには着よ

いつはりのなきよなりせはといふ歌の心を

ます鏡こころもうつるものならはなへてよの中やすけからまし

從三位松平春嶽公より神社秀康公御相殿に座す東照宮の

爲御神体久能寶藏より笏を送りける時よみて給はりたる

歌のかへし

ことの葉のはなのほひのふかけれはう倍春山と君をいふらむ

東照るかみにつかゆるひろそてにあまれるものは君かことの葉

六月はかり病に臥して短夜の明るをまちて

夏の夜にきく鳥のねのうれしきはいかに老ぬるわか身なるらむ

病癒たる節醫師柏原氏におくる

空こととわれさへおもふさみたれのはれにしあとのあり明の月

出島竹齋の和歌について

あるたふとき人我草案を八月はかり訪ひませるに
よみて奉る

わか宿の浅芽ふみわけ訪ふ君のめくみのつゆにぬるるけふかな
は月のすえ府中の大城のうちの御藏のちりはらひに
行て

千世ふともくちすこそあらめ東照る神しまししこれのみ殿は
このころ虎列刺といふあしきやまひはやりて國中恐る
あしたにかかれは晝の間に死ゆふへに發れば夜の程に
死すみな家の業ひもわすれ悲めるを

目にみえぬ風ある世もしらつゆの草の葉ことにむすふ玉の緒
虎列刺といふ悪疫流行りて朝夕産土神に此けに
ふれんことを恐みてねぎ申て

難波江のあしかるつゆをむすはしとあしたゆふへにはらふ神風
江尻なる野村孫平主か次女産れ其名を付けよといへるに
稲といふ名付てよみける歌

千五百秋ゆたかなるへき稲の穂に寄せむ穗浪のしるくこそあれ
十五年ふみ月はかり朝鮮國のもの吾公使館へ暴行あり此
ほとはよの中何となく静かならぬに兵をくり出さむ杯人
々いひあへりけるを實におそましき事とおもひてよめる
武内かみのみことのいまも世にいまそかりせはかくはあらしを
士族の授産の法の爲東照宮の社金を助成し遣し其

開業のむしろにてよめる

この君のかはらぬいろの笠を着てしもゆきしのけ松のしたくさ

子持坂村水野市郎氏は吾爲には子といふへき齡によ
ろつしたしうしたるに身まかりぬとききて其妻なる

人によみて送りける

おもひきやふちのころもを君まさてまつの操に着せて見むとは
妻のなくなりたる又の年寢覺に鈴虫をききて女

此むしをいとめてたりければ

鈴むしのなくねは去年のそれなから妹か手まかて聞のさひしさ
陽曆に改りて二三四月を春と定めけるよしききて

花とりのいろねをまつのしたかけに待遠くしてのとけくもなし

上下押並て花火を好み殊更流星といふに釣星とい

ひて中空に久しう留るかはやりけるを雨の降にいたく

ものしければ

かはり行世のさかなれやくもる夜もくも間なかるる星のかすかす

徳川三代將軍家光おさなきころ書れし鶏の墨絵を得て

ゆたかなるとしには鳥のなくさへも家光べきこえのみそする

明治十六年御歌會兼題四海清

秋津しまめくれる海のしつけさにうらわの松もえたをならさす

ある高貴の人々に書を贈とてよめる

した草のつゆとしめくめあふきみる天のかはらの水くきのあと

天地庵といへる誹人寄花歌詠へるに詠て遣す

天地にあまれるものはふたつなきよしの山のさくらなりけり

十七年五月はかり友人平山陳平警視廳にめされて

京に參登らるる時別れによりて參らす

わかれ路に種蒔きしをわすれ草ゆくすえかけてしけり逢むため
いつるよりいるそらとほくむさし野の隅田の川にすまむ月かけ

吾よりある貴き方へねぎ事聞え上侍りけるにその

ことうけひき給て後忘れし杯の玉ふと承り侍りて

わすらるる名のみしけりておきなくさ雪をかしらに下籠りつつ

人の賀に

七十路はものかは千代も換るへきいろなくしけるそののくれ竹

吾若かりし程花みむため年のはに心をいれてうえ生し

たる梅の七十の年の春は殊にいろこく咲けるを

なかめ來し春ことの色よりもまさりてにほふ梅のはなかな

高貴の御方より物を賜りて

くもの上のめくみの露のかかる世はうれしきに又ぬるる袖かな

松島吉平ぬしきさらきはかり近きころよみし歌

聞せよとありけるに

おきなくさ埋れし雪のとけやらてまたしたもえの言の葉もなし

みわたせはかすみも花とにほふなり引佐細江のはるのゆふくれ

さく花とかすみかかりてみゆるかな松か千島のはるのあけほの

伊豆國伊東人下田義天類といふ人伊藤宮内郷か支那へ

公使に立せ給ひし時我等か友集ひて小梳神社に其海上

の行來又國の光りをかかやかし給ひて歸り事奏させ給

へといのるをみていと雄々しき長歌よみておくら

れけるに答へたる歌

身にまとふつりをわらふよのなかにこころの務みる人もかな

伊佐岑満老人か大字の幅物二葉世に云上代様の

ふりのをわすれられるその謝によりて參らす

天の川たかき流れをまなひ得て世にあふかるるみつくきのあと

をりにふれて

わかこころ人にまはし難きかな眞ことを厭ふいまのよの中

農民

いのちつく米ならしむる人をこそ實に田からとはいふへかりける

とみもせずまつしくもあらずづものつくる人こそ寶なりけり

ある醫師の身まかりにけるを

生くすりもたる甲斐なく天かけりうき世はなれていにし君かな

ある人の書残したるものをみて

みる人の袖こそぬるれ残しおきしふかきあはれのみつくきの跡

戸塚種子ぬしか十九年五月廿四日身まかりにけるに

よみて手向ける

きみまさぬ軒の松風あすよりはさひしきおとをたれに問はまし

從四位議官關口隆吉君陸奥の國のうちにも寒さのたへか

たなるくにに民の治にまかり給ひし時秋の末紅葉は猶色深

きに雪のふりかかりければ其さまいひしらすおもしろかり

しと宣ふを聞てよめる

香くはしき春のこすえも及はしな紅葉にかかるゆきのはつはな

いとうるはしき薄尾花をとりきて與へけるを瓶にさして

出島竹斎の和歌について

床に置いてよめる

あなあやしまねくをさかの花薄まねかぬおのかとこに來にけり
 飯炊く釜の蒸氣にて鳴事あるは凶事のいたらむ兆なりと云
 傳ふとてある人いたくところに思ひくるしむによみて與ふ
 あしきこと繁きかもとをかりはらふ爲にとけふは敏鎌なるらむ
 去年の冬身まかりたる人の家に行て梅の花の許にて
 うくひすは何とつくらむこのはるはきく人ちりし梅のしたかけ

入獄人に遣しける

かりそめのまよひの雲に覆はれて照る日のかけをしらぬ人かな
 あるをりに

ありとある天の益人うえわたすさなへにむすふつゆのたまの緒
 うきをのみ流す涙とおもひしにうれしきこともうかむなりけり
 山柿のしぶくのみ代をすくし來て思ふことなきこの身なりけり

述懐

世をも捨身をもすてむとおもひつつすくる月日をなをしむらむ
 うらやまし露にやとかる月かけはむかしも今もかはらさりけり
 磨き立てたまとみえても甲斐そなきこの世は誰も露の身なれば
 愚なる身のさがなりとけふそしる進むへき世にかくおくれつつ
 年ごとに松をひくまの風のおとに春ののとけきしらへをそきく
 老となるとしもゆくへをまとはなむゆきに埋れし竹のしたみち
 七十のはるへてにほふうりのはな花となおもひそ色も香もなし
 をりにふれて

いつのまにおのかこころやくもりけん晴ゆく月の影もやとらす

老人の述懐

來しかたをおもひかへりみ忘れ井のみつからうとき心をそしる
 なにこともおこたるのみの老か身もふるとし月は人なみにして
 身につもる年月のみはおこたらでよろつのは忘られにけり
 としことにまさるなみたの川上は老をかさねしやまとこそしれ
 のかれ住うき世の果をわすれてはまた何くれとおもふはかなさ
 風を待つゆをよすかになくむしを我によそへてあはれとそきく

閑居述懐

人をいとひ人にいとはれ存命てをしむいのちそものわらひなる

山居述懐

世のうさをこりて入にし山すみも木を友のやとにそありける

冬述懐

ふる雪にきそひ遊へる犬もあるにうづみひ去らぬ猫のかなしさ

寄時雨述懐

さためなくよにふるかひのなきものは老行われとしくれ也けり

寄鏡老人述懐

いつはりのある世も今は甲斐そなきおひの姿のうつるかかみは

ある時よみける寄早苗述懐

すすみゆく千町の小田のわか苗につらぬきとめむつゆの玉の緒

寄雪述懐

初雪をなとか愛らむふりつもるおのかかしらはかへりみもせて

月前懷舊

見るかうちにありし面影浮ひ出て月そむかしのしのひくさなる

寄紅葉懷舊

君まさは樹々の紅葉を言の葉のいろにもそめてかたらはましを
もみちはのいろをかたみと残りけむ秋のあはれをしのふけふ哉

品川氏の父の十三回忌に寄竹懷舊

言の葉の友としきは呉竹のよにあひひぬもしのはるるかな

小林年保主の父七十の賀によみておくる

老のさか高嶺もやすくこえぬへしけふをふもとの山くちにして

七十賀の歌大政大臣を始其外の人々よりあまた給はり

てよみける

青雲の上より洩るるしらつゆのめくみにぬるる今日のそてかな

七十賀して祝ひの時

笛たけのみやひのうえによろつ世をしらへ合するのきの松かせ

七十の賀しける時三條相國はしめ雲の上人より祝の歌を

給はりてよみ侍りける

雲るよりめくみのつゆに今年またはるしりそむるおきな草かな
おろかなるおのか齡ひは七十もまだわかたけといふへかりけり

遠江國濱松驛市川浪次郎氏の祖父八十八の賀筵の

歌寄けるによみておくる

かきりなくみゆる親木のふかみとり小松の小松しけりあへとも

八十八歳に成る老人の三夫婦なる賀によみ與へける

あひおひの松の小まつのその子まつ三千年絶ぬかけそみえける

寄山祝

うこきなきみよのためしに世々へても姿かはらぬふ盡のしは山

迎妻祝

千代ふかき常盤のかけの緒葉草けふをあふひのはしめにはせよ

寄巖祝

ふかみとりかはらぬいろは君なれやいはほをつつむこけのさ緑

梅の花を掛花に活たるか其器くたけて水のもりて

寄竹祝といふ歌の短冊にかかりければよみける

梅かえにむすひし露のかかりてそ竹の葉までも香にほふなる

遠江國小國神社遷宮奉納寄松祝十九年七月

みわの山千もと生たつかみ杉はみよのまもりに代々しけるらむ

ある友人の許より支那人のものせしなりとて竹の札を

おくられるか其工か名を竹齋とあり自ら吾名に合り

けるをあやしみ書付ける

この君にまた色そふる言の葉もかはらぬたけのおきななりけり

今年は四月ころより雨ふりがちにて殊にこの五月六月

七月とはれ間なく降けるに五十年前天保六未年の飢饉

の基ひの事にさも替らぬは老の身の其事忘れかたく心

くるしくのみ日をふるによめる

かきりなくふるさみたれに袖ぬらす心のあめのはるる日そなき

師の鬼島大人の伊勢のくにかへらせ給ふ別に臨みてまた

も來てとのたまふを承てよみ侍りける

うらやすく二見てふ名を頼む身にいつしくれてか袖のしをるる

出島竹斎の和歌について

反歌

うくひすよ春はゆくとも夏までもかかれるまつのふち浪に鳴け

春興をよみける

春の野に打出てみれば乙女等は赤裳裾曳白妙の袖うち振てえくるむ
と澤に下立葉をつむと丘に並立そをみれば最ものどけし山のははう
ららに霞み咲匂ふ梅の匂を吹く風の朝な夕なに鳥の聲をもそへて運
ひきて春の光をしきわたす苔の庭に圓居して心をやれば久方の天津
眞空も時しりて雲雀は啼ぬかれといひ是と思ひて青柳のいと長き日
もおもふとちあかてくれけり野邊のあそひに

六月一日久能東照宮祭典に社頭夏月といふを題にて

人々献詠するによめる

くるるかとおもへは更る夏の夜にはあれと穴あやし忌垣に匂ふ
うの花の雪かともれはさはあらで神の宮居の片そきの行合の間より
照る影の光りなりけり其月影の片むけはかたむくまにま霜のいろは
あとそととめぬ榊葉に百度千度おけとおけとふれともふれと榊葉の
色は曇らす大恵の恵みと共に月影は猶中空に在明の空

反歌

片そきの行合の間より照る月のかげにそ結ふ夏の夜の霜

山家時鳥といふ事をよめる

不絶聞軒の松風不絶聞門の澤水世の塵を拂ふ松風うき事を洗ふ澤水
朝夕に耳に馴たる山住は吉事凶事世の事は絶てし不聞身庭あれとき
かむと思布あはれをはれはれとしるや時鳥初音乎吾爾洩志てそゆく

初秋をよみける

落そむる桐の一片の其ひまを三日月てらし吹初る萩の上風其音に寐
覺しりそめ次次は野邊の七草錦なし軒はの虫の聲に妻とふ鹿に染
つくすもみちの色にさまざまのあはれそふかき落初るきりの一葉を
はしめにはして

朝顔をよめる歌

朝顔の花をもしろしと人はいへと咲初しより朝な朝な盛ひさしく月草
の移り安きは人心春去來婆梅か香を運ぶ春風柳庭おのか姿をあらは
せる其風をしも櫻にはいとひ惜みて若葉さす樹々のうれには其風を
待に待侘朝ゆふに愛み嬉み秋去は軒庭の萩の戦きをもなからまし
かはとかりに思ふ心をつれもなくもろきものとし花はみるらむ

秋七草歌

秋の野の錦の床に咲匂ふ萩か花妻白露の玉に伸伏夕されは尾花か袖
はまねけともうらみ顔なる葛の花吹來る風に撫子は吹くかまにまに
から錦花の紐解吾方へ咲くとみえし女郎花花の心はいかなれや風吹
方へ忽に面回をむけぬ藤袴年の毎にきてみれとあはれなりけり朝
顔は朝々毎に咲出て日敷ひさしく匂へるによるつの物も秋の野をあ
はれとしるやいろいろの虫のねすたき月も又よなよな宿りあはれと
もうしともいひて定むへき言のはもなし野邊の朝夕

秋興を詠る

七草の花の匂ひに終日はうき事忘れぬは玉の夜にしなれば虫のねに
あはれを覚え月影に心をすまし四の時何れはあれと露霜の秋にまさ
れる時もなし白露の玉をかさして女郎花なまめく色に萩の花ゆかり

の色に撫子のやさしきいろに人まなく尾花のなさけ鈴むしの振出る
 聲きりきりす夜寒をしらせあはれしる人まつ虫の音信にあはれもあ
 はれあはれさをたくへていはむ言の葉もなし

草庵冬來作歌

眞垣庭白菊匂此淺芽庭霜花咲秋色者此爾殘淺芽生爾冬者來爾計里不
 人間宿庭雖在折節の阿波禮者深之谷乃下庵

老人待春作歌

たらちねの母に添臥ゆひ折て春を待つつ寐る數を算へしむかし思出
 てみかへして竹馬のわか友とちこれかれとおもひ出れは其友はなき
 人となり物皆はふり行とも吾のみは今に残りて春を待心はかりはか
 はらさりけり

老を歎きてよみける歌

かくはかり安らけき世にかくはかり惠ある世に産れ逢ひて春ざりく
 れは咲花に心なくさめ秋去婆月夜にうかれそを思へは惠み貴し其を
 もへは安御代樂しかかる代に千年もかもと思へとも中々つらし黒髪
 は雪に埋れ弓の如腰はかかまり其弓の射矢の如く年月の立てし行は
 行年を惜みなからに來春をよろこひまつそいともはかなき

秋野

花すすきまねく交野にをとつ日もきのふも今日も八千草の匂ふ盛り
 をおもふとち手折み愛みあしたより夕になれと猶あかてくさの枕を
 結はむと思ふはかりにおもほゆるかも

秋暑といふ事をよめる

指折秋立し日は算ふれと桐の一葉もまた落す門の柳の深みとり色も

其儘荒金の土さへさけて照りに照る暑き日影は猶も其儘

吾童名を竹藏といひ又今年六十年になり隠居て竹齋と
 名を改めてよめる

世の中の吉事凶事往通ふ其ふしふしの風ふけと雪も積れと起返り六
 十ちになれと色換すみとりそひゆく園のくれ竹

明治十三年一月參議陸軍卿山縣在朋卿參議内務卿伊藤

博文卿大藏大輔松方正義朝臣吾久能山詣給時作歌

打寄留駿河國乃久能山乃霞分筒久方乃星乃光乃顯宮居輝久事者霜
 牛吐神母嬉之加留良牟

大谷村戸長役場開業之歌

久能山に鎮り居ます大神の日の御饌田とたたへはやくより定めてあ
 りし名西負ふ大谷の村はならの葉の廣くしあれはまちまちに小名さ
 へ負ひて何くれの事も別れて往來しを万の事の明らけく治る御代に
 よの人の進み行成る眞こ眞ろに費を厭ひ夫々の手をさへはふき千萬
 の事等悉一群に結び合せて鹿兒自物一ツ心をつころにて包むをしら
 に語り合ひ里の眞中に形の如最嚴めしく殿造國の御法の事議り里の
 控執行て里を治めむ村長の役所と影面は海面いたき沖邊には釣する
 小舟星の如伊漕むらかり磯邊には網引海士等指折算へ盡せず背面に
 は群山續きいろかへぬ松のみとりの茂り合ひ弓手の方は千里なす白
 濱つつき目手みれば千町田つつきは叙此不足事なき百千足足らひ行
 へき里は此里

出島竹齋の和歌について

明治十六年茶のあたへのいたく下りて國中何となく

ものさひしくなりけるによめる

宇治山の木の芽ゆ匂ふ花の香の盛りにさかり國中みな高き賤しき押
並てその花の香を愛にめてめてのあまりにいかめしく家居をつくり
美しきころも装ひをしものも何くれとなくあくまでになしてし居
れはあかぬ事なき世にはあれと何事もよろつの事にかきりあれは月
のみちかけ節々のさむさ暑さの往通ふ事の如今年はも其花の香のく
ちなしの色もおとろへたかいふとしるく分ねと山さくら咲の盛りに
級戸邊の風吹こくとく秋の夜のさやけき月をむら雲の覆ふか如くなり
にしも思へは遠しいにしへゆかく成り行かよの中のうちき事のさまし
かはあれとあはれなりけりあはれよの中

徳川従三位家達君に子日の松を奉りけるによみて添へ侍りける
今年生の二葉の小まつうつし植て今よりさきは影高く榮え行へし百
千枝に茂り行へし影高く榮行なは天津水世に仰れむ百千枝にしけり
行なは代の風の宿りとならむしかありていやしくしくに雪降らは笠
とたのまむ霜置かは簑と頼む霜雪の露の恵に伸伏ていよいよ茂らむ
くにのたみくさ

ひきううるふたはの松は掛卷もあやにかしこき東照神の命の千代か
けてしろしめしける妻戀る小鹿の山に並立る千代ふる松のたねなれ
は今より後の千五百秋水穂のあきの秋風のかせの宿りとさかえか行
かむ

静岡の大城の中なる東照神の御手から植給ひしといへる

梅木を公にぞ申し久能山に移し植てよめる

東照神の命の現世に駿河國の静岡の大城中に御手つから植給ひにし
梅はしも幾年ふれと色も香もかはらさりけり然はあれと今は大城に
すむ君のあらずなれば古里と荒のみまさるを佛見ればゆかしく佛
を見れば悲しく大神の如何御念食らむとあやに恐こくそ思は秋に
もあらて白露の袖に玉なす曾古故に朝廷に歎きこひ奏し坐久能山の
齋垣の中に移植て往先祝布梅の花の万代掛天春毎に益々匂へ今日を
始に

奉詠小梳神社遷宮祝歌

荊薦のみだれし筋を解分る小梳宮は大神の心にかにみいかりの事
やまも劔不淨の事や在劔火具突の其禍に去之頃焼亡しを里人等甚歎
ひ神官甚く畏み古の聖の御代の法の如建備へむと村肝の心をくだき
くまも落す不足事なく造り立千代萬世も朽すあれと里人競ひくもり
なき赤き心の赤金を高く萱なし御屋根葺御棟の千木は黄金もて装ひ
奉れる新宮に遷奉れは今従は禍事有す宮居には更にもいはす氏子町
も事みち足らひつけの木の小梳の宮の名もしるく筋を正しく万世も
笑み榮えつつ世乎は徑努辨之

高殿に登りて酒杯たうへ物語などしてよみける歌

今の紺屋町正二位慶喜公御館なり

高殿のいつれはあれとこの殿の四方の詠めはをりふしにあかぬ事な
し春くれは腰にめくれる稻川の里の賤の女裳裾曳根芹つむみゆ廣幡
の八幡の岡はまのあたり松の緑の色ふかく遠のむら山花咲ははれぬ

くもりの朝夕になへてあはれに霞つつ夏にしなれは有渡濱ゆ風吹渡り足垣の眞近き里は千町田の緑榮行秋の田の瑞穂もしるし秋のよは四方に限なく月澄めは心もすみて背面なる信濃の高嶺影面の伊豆の遠山零積る雪に間近し富士の嶺の時自久の雪は軒高くときはにみえて四方山の詠めにとめる此殿は類ひまたなき處なりけり

替明治十九年近代稀成稻作豊成乎歌

千五百秋水穂のくにの名にしるく神世なからに傳へ來し儘には雖有禍津日の雨風あらく早して損ふ事の常なるを今年のあきは天地の神の依しの御恵にたかふ事なく國々の高田久保田を押並て實は八束穂の足穂なす田面の形は老人母見聞し事も無きまでに稀ともまれの豊さは是叙名に負ふ浦安の國

賛小坂山蜜柑の豊熟を歌

時じくのかくのこの實の小金以てつくりしか如うつくしく枝もたわわにかくはしく枝もしたりてなりになりそれをしみれは春秋の花ももみちも及しなそのしろかねに里人は富榮え行この山は國の寶そ此山は人めつる山妹かうむ小坂の山は黄金花咲

有渡郡安古神社に詣て詠歌

足日賣神命の加良國をことむけ給ひし美功を助奉之武内宿根根命常磐に鎮座大宮波千年八千年色換奴松の梢の景高久千木の光の曇無く榮行宮乎賤雄の現に拜事の貴左

ある貴人吾をいとねもころに恵み給へるに吾もしたひ

日毎に参り侍りて何くれの物語の節によみける歌

天地と隔たるるか如君と吾隔たりはそれと月と水うつるか如く君と

吾品は換れと山の井の淺くはあれと吾心濁りなければ月影の宿るか如くねもころに恵み給へと天つ水仰か如くみとり子の乳すふか如くぬは玉の夜は須柄に晝は日のしめらにそ思ふおろかなる我にはあれとも忘らるる時こそなけれきみかめくみは

不盡山をよめる歌

あまそそるふしの高ねは山といふ山の太君くにくにの八重かさなれる群山を臣らひきゐる高き名はいたりいたらぬ國はなし其不盡の嶺を朝夕にみるも恐しいにしへゆ其名聞えし風流雄の文にもつくり歌によみありけるものを今更に短き己か心もて何とかいはむ天雲も伊去憚る此峯を稱へていはむ言のはもなし

全しく

ふしか嶺の時自久雪も今日のみは残り少し大空のみとりのいろも國原の青田の稻も一列にみゆるもおかし時しらぬ山も時しり白妙の衣ぬきすて着る笠の雲のはたてに今夜又ふるへき雪の初花の其おもかけのしるくこそあれ

或時よめる歌

さくら花咲も代のさまこの花の散も世の形秋の夜の隈なき月も村雲の掛れる宵も世の人の高き賤き智さへ長く短く物みな定めなければさもあらはあれとはかねておもへと捨てられぬあはれ世の中

家人等にさとして残す歌

天の下國といふ國にありとある其人毎に子孫を思はぬはなしおのか子を愛ぬはなし子の爲に業不怠家起彌繼々に親々の傳へし業をさかしらに勤な換會由更々に家勿換會由親々の心乎伊津母心にて遠み親

出島竹斎の和歌について

の奇魂祭勿絶ち曾子孫に言繼傳へ子孫母猶幾世々に勤て由目勿忘會
不尺の嶺の雪者消友道奥の未の松山浪者越とも

詠田兒浦歌

田兒浦漕出見は久方能雲居に高さ不盡之ねの時自久雪者海原の底に
現れ古従色母不換茂立有三穂の松枝重浪の彌志久々に影差て海人
賀釣舟朝廷帆の影面に日影受歸る夕者なみのへの背面に受て鯛平目
得物也多く海人我子の百舟千舟往通乎雖見不足田兒の海面

老人述懐

苗代の水口祭あしたより笠をかむらせ蓑を着せ晝は終日ぬは玉の夜
は須柄にたたせ置休ふ時なく朝廷鳥を守らせ夕庭雀を爲追秋去は長
き夜いねす鳴子引鹿を追やりよの人の寄の儘に仕へきて秋果ぬなは
雪降と嵐は雖吹蓑笠の着て影なき其影をあはれといへる人もなしあ
はれそほと身の身を如何にせむ

詠人心移易

かはらしとみな人毎におのか十六口にはいひてほこれとも空もうら
らにさくさ花咲のさかりは笹の葉の動くはかりにふくかせを厭ひに
いとひ其花の雪と零消其跡に若葉しければ其かけに待にまちとり愛
に愛人の心の月草のうつり安きを風は又いかにいふらむいかにおも
はむ

友人におくる

うきこともうれしきことも竹馬の友に見聞し中りきの隔をしらぬさ
す竹の君はいかなるよしありてうき世の中に人多にみちてはあれと
友人は多にあれとも今更に顧みすればその人はなき人となりきみと

われ世になからへて七十の稀の齡の坂こえて子等や孫らかひむかし
に西に走りて家の業に心くたけは世の塵はかたみにさけてくもりな
く心のすめはよの中におもふ事なき老の身のやすき月日をけふそか
たるふ花にかせ月に村雲かかりても心しすめはものおもひはなし

竹をよみける歌

木にもあらず草にせあらず幾世にもかはらぬ色は君か代のうれしき
ぬしのふしふしを年の端毎にあらはして吹くる風の吹かたへなひき
かたより降雪にうつもれゆけと風和は素の姿に雪消は己か質に起返
り世にたわまぬは園の呉竹

沖の千重波のはしき

おきとほくちへなすよする出嶋の翁は、家の事をはしめ世の爲人のため、ひろく心を尽し、何くれと事しけき中にも、歌よむ事を好み、月花のをりふしにつけて、よみ出つつ、いと若かりける時より、此のみやひの道をなむ又なき樂しみとはなしける、されと、つねにいとまなかりし故にや、一卷とたにまとめて、かきおきたるはなく、みまかり玉ひての後は、日に月に、いつとなく、ちりほひゆくのみにて、つひには濱千鳥跡をとめずなりなむものと、今の家のあるじ氏族の人々歎かひつつ、いかで、いささか残れるをたにとてかく一卷とはなしつるなり、さるは短冊にかきて、人のもとにつかはしたるをうつし、或は反古の中より拾ひ出なとしてあつまるままに集めたるにて、あつめおきたる中より、えらひとれるにはあらざれば、おのつから、みたれたるふしもやあらむ、さて巻の名を、いかにつけはよけむとおのがもとに、いひおこせたりければ翁が家の姓の枕詞めきて、沖の千重波にては、いかかやと、かへりことせしかば、其由ひとくんだり、かきしるしてよとありけり、其言や翁かよにありて、まのあたり、いひおほするこことせられて、いなみかたくて、たたことに、ひとことをかくなむ。

明治三十七年の春

静篁舎の主

三浦弘夫

『解説』

出島竹斎の歌集『沖の千重波』は、幻の歌集といわれている。すぐれたものであるとの評判はあったが、実物を目にするものはずくなかったからである。自費出版であり、関係者のみに配られた『追悼集』であったこともあり、これまで、世の中から忘れられていた。

とは言え、内容的には、幕末・明治初期の静岡県、特に静岡市一帯の風物についての描写では、いままも評価されるものがあり、これほど市内各地をうたつたものは少ないと言える。

そういう点では価値の高いものであるが、今回のものが初めての『活字版』である。原本は、当時を反映して変体仮名を多用しており、これも知られない一因になっている。

前編の『はしがき』で三浦弘夫氏がのべているように、『沖の千重波』とは、『出島家の枕ことば』だと言えよう。出ている島・すなわち半島の先の海によせては返す波という意味なのだ。歌集の最初に『おおき空・なみもひとつに・うみをいでて・雲まただよふ・月のしぶきかな』と詠んでいるのが、このあたりをさす。

三浦弘夫は静岡市内の「小梳神社」神官であり、そこに竹斎が明治九年『皇学舎』という学校を開いた。『国漢字・珠算・書道』な

出島竹斎の和歌について

どを教え、三浦氏が『教員総司』となり、竹斎も弟子の育成に従事した。そのことは広く世に知られるようになり、明治十一年、明治天皇が静岡に行幸なさったときは、とくに呼び出され、直接お言葉をかけられたばかりか、羽二重一疋と『褒詞』をたまわっている。これは当時大変な名誉であり、それから竹斎は『久能山東照宮』の神職になっている。やがて竹斎は明治十八年駿河国神道分局皇典講究分所所長という神職の地方における最高地位についている。注①

こうしたことから三浦弘夫との関係は深く、彼が没後の遺稿を整理・編集したのであった。

このあいだに特に触れておきたいことがふたつある。ひとつは、『久能文庫』設立への尽力である。本来これは、県令関口隆吉（一八三六〜一八八九）が提唱したものであった。明治二十年元旦から発足するものであったが、関口知事（制度改正で知事に）が明治二十二年五月に死去したため、中断したままとなっていたのであるが、関口家の家族や竹斎家親族たちはその志を継承し、ついに最初の計画時から三十年経った大正十年、子息である関口隆生（浜松高等工業学校・現静岡大学工学部・校長）から、書籍二千冊が道岡秀彦知事に寄贈され、これが『久能文庫』から改命し、『葵文庫』となり、やがて『静岡県立中央図書館』になっていくのである。この『葵文庫』の発足に竹斎および、その家族が協力したことをわすれてはなるまい。注②

もうひとつは、『東照宮昇格運動』である。明治となり、徳川は朝敵だったため、ここは同社の不遇時代が続いた。神官であった竹斎は、関口知事とともに、その地位向上に努力したのである。内閣や関係官庁に精力的な働きかけをし、ついに明治二十年六月、『久能山東照宮』は『別格官幣社』に、『静岡浅間神社』は『国幣小社』に列せられたのである。注③

この当時において、そのことは大きな意味を持っていた。なによりも

『正式な神社』になったため、財政的に安定したということである。神社に欠かせない『神事』が行えるからである。

氏子を持たない同社にとって特にこの意味は大きい、肩身の狭い思いをしていた旧徳川家関係者にとっても、それは大きな安心感を与えてくれるものであった。

ばかりか、同社の文化財は今日まで守られ、維持されてきたのである。

いわば、竹斎は関口県令とともに『東照宮』の維持発展にも大きく貢献したわけで、このあたりについても評価されるべきであろう。いま『久能山東照宮』の南がわ登り口に『出島竹斎の碑』が建てられているのも、その絶大な功績を示すものと言えよう。

やがて、この家系は、社会に貢献する徳ある家として、続いていく。子息は、米国に行き、やがて横浜に居住するが、その子息、竹

齋にとり孫にあたる出島徳太郎は、明治四十四年、『恩賜財団・済生会』が設立され、静岡にも『済生会病院』がつくられることとなったとき、大口寄付者をしている。記録には『豊田村・出島徳太郎』の名前があり、一金五百円を寄付している。徳太郎は、その他『久能山東照宮』境内に石鳥居を寄付し、現存している。

ご子孫は、いまでも竹齋問当時とかわらず、静岡市小鹿に居住し、営農の道を守っておられる。

徳あるものの余慶は後世に及ぶことが証明されているのである。

おわり

『資料』

歌集『沖の千重波』の竹齋自筆和歌および久能山下『出島竹齋碑』
『久能山叢書』全巻及び筆者の聞きとりによる。

注

- ① 『静岡県・安部郡誌』大正三年
 - ② 『関口隆吉の生涯』八木繁樹・一九八三年八月・緑蔭書房
 - ③ 『関口隆吉傳』関口隆正・昭和十三年五月、何陋軒書屋
- その他、出島恵美氏、出島勝朗氏（直系）成澤政江氏からの聞き書きによる。
大変貴重な話をたまわった厚くお礼を申しあげたい。